純粋で、繊細で、優しさに満ち溢れ、哀しいほどに美しい…

アドルフォ・バラビーノのピアノ

～過去のリサイタルに寄せられた声より～

・・・アドルフォ・バラビーノ氏のピアノの音は特別だった。意図する音を創り出すというより、宇宙上にある音自らと、アドルフォの指が出会い、一瞬のうちに探し当ててそこに音が現れる感じ。言葉では表現しがたく、ありきたりな褒め言葉になるのを恐れずに言えば、「堅固な中にも、繊細でピュアな音の泉のような、湧き出してくる音楽」・・・・・・
「葬送行進曲」は、東北の人たちへの鎮魂が込められていて、無言な中にも、激情と悼みと祈りのようなものさえ感じられ、涙が込みあげた・・・。音楽の凄さ、素晴らしさ、有り難さをかつてこれほど感じたことがあっただろうか・・・。**（2011年、震災直後の来日リサイタル）**

・・・燕尾服の長い裾をひるがえし、銀色の長髪をなびかせて、演奏会場となっているお城のボールルームに現れたバラビーノ氏は、その姿だけでも十分に巨匠と呼ばれるにふさわしい趣だった。巧みなテクニックでピアノのキーを思うがままに操り、シルクのような光沢のある音色で紡ぎだす音楽は、聴衆のあらゆる期待を裏切らなかった。
リサイタルの前半では、中期のソナタをはじめとするベートーベンの数曲が、力強く演奏された。そして後半のショパン・・、これぞ、このピアニストの真骨頂であった。聴衆の誰もが、音が消え去ったあとの美しい余韻に、夢の世界へ導かれる思いであった。**（2009年、英国でのリサイタル）**

・・・「最初の1音で彼の世界にぐいっと引き込まれました。音色のやわらかさ、とくにピアニシモの儚さに特筆すべきものがありました。かといって、決して音が細く、か弱いわけではないのです・・」**（2014年、奈良ピアノフェスティバル）**

・・・「その情熱が聴衆に自然と乗りうつるような演奏」（“infectiously enthusiastic pianist”）**（2014年、英国でのリサイタル）**

・・・彼が弾くショパンは、まるで細い蜘蛛の糸に下りた夜露が真珠のように小さく連なって、朝の透明な光に輝き始めたのを見るかのように、儚く美しい。やがて日が昇れば消えてしまうその真珠たちのつかの間の輝きは、とどめておくことのできない時間の流れを内包しているからこそ、小さくとも強い輝きを放つのだ。それは、決してあらゆる人にとって直ちに心奪われる景色ではないかもしれない。だが、一旦その美しさに気付いた人にとっては、もはや、彼の音以外は受け入れがたいと思われるほど、強烈な印象となって心に刻まれる。**（2014年、プライベート・コンサート）**

2015年 アドルフォ・バラビーノ来日公演日程

11月27日（金）	札幌コンサートホールKitara小ホール	
12月　1日（火）	名古屋・電気文化会館	ザ・コンサートホール
12月　4日（金）	東京・サントリーホール	ブルーローズ（小ホール）

（名古屋、東京公演のチケット取扱いは、KCMチケットサービス☎0570-00-8255）

アドルフォ・バラビーノ（ピアノ）
Adolfo Barabino, piano

イタリア・ジェノバに生まれ、パガニーニ音楽院でエミリオ・ボニーノに師事する傍ら、アンジェイ・ヤシンスキのもとで研鑽を積んだ。15歳のときに「Citta di Stresa International Piano Competition」で優勝、その後ミュンヘンにおける「European Selection Winners & Masters」でも優勝し、ヨーロッパ各国で積極的な演奏活動を開始した。

現在イギリス在住で、クラウディオ・レコードの専属アーティストとして、ショパン全作品の録音に取り組んでいる。2014年に録音したロンドン交響楽団とのショパンピアノ協奏曲第2番のCD が今年発売される。

このほか、スペインのRadio Classica では数多くのライヴ録音を行い、フランスのCanal 2 でのラヴェル作品の演奏がテレビ放映されたほか、ショパンの2つのピアノ協奏曲をヴェネズエラ、リマ、キューバの交響楽団と共演し、その様子は南米各国で国営放映された。2014年には、奈良市における「奈良ピアノフェティバル」に外国人アーティストとして初めて招かれて日本の様々なジャンルのピアニストと共演し、その様子は毎日放送でインタビューとともに放映された。

これまでヨーロッパでは、ロンドンのウィグモア・ホールをはじめとする数多くの主要都市でリサイタルを開催するとともに、ブダペスト祝祭管弦楽団、ルーマニア国立放送管弦楽団、マルキジアーナ・フィルハーモニー管弦楽団、ロンドン・フィルハーモニー管弦楽団、ロンドン交響楽団と共演している。

このような演奏活動に加え、各国でマスタークラスを行い、鍵盤というものに対する研究法、そして「伝達の手段としての音」に関する講座を数多く開いている。イギリス南部サセックス州のアーディングリー・カレッジで年3回行っているマスタークラスには、毎回ヨーロッパ各国や日本から様々な目的を持った受講生が集う。すでにプロとして活躍しているピアニストの参加も多数。音楽的な表現を大切にするその指導法は、日本の国内コンクールで優勝歴のある受講者にも大変好評で、「今までに受けたどのレッスンよりも感銘を受けた」と評された。

洗練された音と卓越した技巧、そして深い知性と感受性に裏打ちされた解釈により、現代における最もすぐれたショパンの演奏家の1人として高く評価されているピアニストであり、スタインウェイ・アーティストである。そのデリケートでニュアンスに溢れた音色は、「ベルベット・タッチ（velvet touch）」と評されている。

オフィシャル・サイト：www.adolfo-barabino.com

川島美樹（ピアノ）*Miki Kawashima, piano*

英国ランシング・カレッジ卒業。在学中2013,2014年にMusic Performance Awardを2年連続受賞。2013年英国ファーナム・コンペティティブ・ミュージック・フェスティバル、シニアリサイタル/ピアノ部門で優勝、Young Musician Award 2013及び全部門最高賞としてJune Fielding Bursary（特別奨学金）を獲得、フェスティバルコンサートの演奏者として招かれた。また、この時の卓越した演奏により、英国で最も古い歴史を持つ室内管弦楽団London Mozart Playersとの共演機会を与えられ、2015年6月モーツァルトのピアノ協奏曲第9番で英国デビュー。

現在、アドルフォ・バラビーノ氏のもとで更なる研鑽を積んでいる。